

チェンマイ大学における SEND プログラムの実践

—日本語教育実習による知的な交流—

コンジット サランヤー

要 旨

チェンマイ大学が SEND プログラムに参加したのは 2013 年からである。プログラムを実行するには様々な難点があったが、各関係者にもたらす成果が予想以上に大きい。本稿はチェンマイ大学におけるプログラム概要の紹介とその教育的な成果について論じ、このような「知的交流」プログラムの継続が期待されると主張したい。

キーワード

SEND 日本語教育 異文化交流 知的な交流 アーティキュレーション

1. チェンマイ大学における SEND プログラム

チェンマイ大学人文学部には学部レベルの日本語教育を担当する日本語学科と、日本研究修士課程を担当している日本研究センターがある。SEND プログラム受け入れは日本研究センターと早稲田大学日本語教育研究科・日本語教育研究センターとの協働プロジェクトとして実行された。連絡の窓口だった筆者は日本語学科教師兼日本研究センター長であり、プログラム担当者でもある。

チェンマイ大学もほかの大学と同様にこのプログラムの実施にあたって様々な難点がある¹。しかし、この教育実習を断るのはもったいない話だと日本語教育実習の報告に関する論文も含めて実習生を受け入れた経験から知った（榎原他 2015）。したがって、学部と交渉し、学生の留学チャンスと、教員同士の学術的な交流のチャンスにつながるメリットを取り上げて説得した。教壇実習は授業担当教師の指導の下で行い、修士課程の実習生をリーダーとし、一部の内容だけを担当するという約束で受け入れ開始が可能になった。両大学の情報を共有し、お互いの状況を考慮した結果、実習プログラムを開始した。実習内容は毎年参加する学生の希望などを考慮して決める。具体的には次の通りである。

1.1 早稲田大学の実習生

1.1.1 教壇実習

SEND 実習生が 2014 年から日本人と中国人の大学院生と日本人の学部生の組合わせで、3 人から 5 人のグループで 2 週間の短期実習生としてチェンマイ大学に来た。2015 年のみ日本人の大学院生 1 人が一学期の長期実習に来た。表 1 は 3 年間の活動をまとめた。

表1 早稲田大学の実習生の担当科目

担当内容	2014 年	2015 年	2016 年
BA の授業見学	・副専攻初級日本語 (113)	・副専攻初級日本語 (111) ・3 年生の文法構造 (語彙)	・3 年生の文法構造 (語彙)
BA の TA	・4 年生の文法構造 (モダリティ) ・4 年生通訳 (ダビング)	・4 年生の文法構造 (モダリティ) ・4 年生通訳 (アクセント) ※長期実習生のみ ・3 年生の文法構造 (語彙) ・副専攻初級日本語 (111) ・4 年生のビジネス日本語 ・4 年生のガイド日本語	・4 年生の文法構造 (モダリティ) ・4 年生通訳 (通訳練習相手) ・3 年生の文法構造 (語彙)
MA の TA	・新聞で学ぶ日本事情 (婚活)	・研究方法論 (調査対象者) ・日本文学 (就活)	・新聞で学ぶ日本事情 (グローバル人材)
日本文化紹介	・抹茶アイスの手作り	・日本の遊び	・文化紹介コーナー
チェンマイ大学の学生との交流	・大学と周辺案内 ・学生活動紹介 ・市内旅行	・大学と周辺案内 ・市内旅行 ・学内スピーチのリハーサル&審査員	・大学と周辺案内 ・学内スピーチのリハーサル
チェンマイ市内の高校生との交流	・チェンマイクリスチャン高校&レジナ高校 (1 日)	・チェンマイクリスチャン高校 (1 日)	・チェンマイクリスチャン高校 (2 日)
他機関との交流	・無し	・桃山学院大学と文化交流 ※長期実習生のみ ・日本人補習校で日本語教育ボランティア活動	・在チェンマイ日本人にチェンマイ大学ツアーの案内

1.2 チェンマイ大学派遣の長期プログラム参加者

チェンマイ大学生が SEND プログラムに参加したのは長期実習生のみである。2015 年に 1 人と 2016 年に 1 人であった。当センターの大学院生は日本研究の修士課程で、2015 年の派遣生は「国際結婚」に関する研究をテーマにする。2016 年の派遣生はパヤオ大学の休職中の日本語教師で、「日本のホラー映画」に関して研究している。日本語教授法に興味があること、一学期というちょうどよい時間、そして、奨学金付きというプログラムだから参加した。

2015 年参加者のヒアリング調査によると、授業は日本語教育研究科と日本語教育研究センターから選択可能だが、日本語のレベルも日本語教育の基礎知識も足りないため日本語教育研究センターの授業を主に選び、課外活動としては「伝統文化体験」の授業で日本の文化に触れた。そして、空いている時は自分の研究の資料収集の時間にしたり、自分の研究を様々な授業で発表してコメントをもらったりした。参加した授業を表 2 でまとめた。

表 2 チェンマイ大学からの長期プログラム参加者が履修した科目

日本語教育研究科	日本語教育研究センター
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語教育演習 2 ・ 教材・教具論（聴講生として） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話そう日本語 ・ トピック・ディスカッション 5-8 ・ クリティカル・リーディング ※課外活動 ・ 伝統文化体験

2. 教育実習における教育成果

2.1 教壇実習の成果

日本語教育実習生を受け入れることは、海外の日本語学習者にとっては同世代の日本人と接するチャンスとなる。現地の非母語話者教員の自信がないアクセントなどの部分を補い、授業を盛り上げることなどの成果があると論文に述べられている（榎原（他）2015 など）。本プログラムは日本人と中国人の大学院生と日本人学部生という組み合わせのチームティーチングという特徴がある。また、大学生だけではなく大学院生にも教育するということも特徴である。このような知的な交流がもたらす教育的な成果について考察したい。

まず、学部生へのアクセント指導クラスをもうけることにより、チェンマイ大学部生が 4・5 人の小人数グループでアクセント・イントネーションの指導を受けることができる。同時に、中国人と日本人の早稲田実習生も準備段階で自分のアクセント・イントネーションについて注意するようになる。さらに、実習生が特別審査員になったのも、チェンマイ大学としては数多くの審査員に審査してもらえる利点はあるが、実習生としては改まった場面にふさわしい言語行動と非言語行動を学ぶ機会になったであろう。

また、日本研究修士課程で TA としての教壇実習は複雑な日本事情をいかに N3 レベルの大学院生に理解してもらえるかという現職教師としても難しい課題にチャレンジできた。クラスでは提供した話題について議論を引き出すために事前準備としてデータ調査と分析を行う必要がある。これは研究者の養成になったと思われる。チェンマイ大学の大学院にとっても、日本の社会で生活している日本人の観点から現代日本の事情を知ること、日本語で日本事情に関する議論をする練習もできた。しかも、日本人、中国人、タイ人の 3 か国が多角的に日本社会について議論ができた。その議論を通して深く関心を持って修士論文の研究テーマにする学生も何人かいた。

パッチャラポー（2015）では大学院は日本語・日本学の研究者を育成する機関であり、世界基準の研究力を持つ研究者、他国の研究者と交流または共同研究を通して蓄積された広い視野が期待されると述べている。また、グローバル化に相応しい人材育成の重要性、日本語・日本語教育の分野を超えた学際的な研究も期待されているとも述べている。

上述のチェンマイ大学の大学院生と早稲田実習生との交流はその期待されているグローバル人材育成そのものではないだろうか。

2.2 文化交流など課外活動の成果

北部タイにおける日本語教育の一つの問題は日本人教師が足りないことが挙げられている(パッチャラポーン 2015)。早稲田実習生をチェンマイ市内の高校へ派遣することによって人数が多い高校生に観光日本語の練習チャンスを与えることになる。自分たちと同年代の日本人との会話や文化交流がしたいという学習者のニーズに応え、学習者のモチベーションアップにもなる。この活動は北部タイの日本語教育に貢献していると評価できると思われる。

当センターは日本事情紹介のハブとしての役割を担っており、多くの教育機関と連携を持つ。そのため、実習生は高校生、他の日本からの大学生、在チェンマイ日本人高齢者との交流ができる。この交流を通して早稲田実習生は文化の発信側だけではなく、今まで意識しなかった日本人、タイ人、中国人の考え方の相違点に気付いた。他の機関からの日本人も同様だとコメントした。これは、参加者の異文化理解が生まれていることを表している。つまり、この活動は異文化理解ができるグローバル化人材育成にもつながると考えられる。

2.3 チェンマイ大学の大学院生派遣の成果

当センターの学生は社会経験が浅い。このプログラムの参加は初めての海外生活である。めったにない火事事件などに巻き込まれ、変わった行動をとるサラリーマンなどにもであった。また、このプログラムで早稲田大学へ派遣されている他の大学からの大学院生の日本語レベル、考察力が高いことにも驚き、単なるカルチャーショックではなかった。しかし、指導教官をはじめ早稲田の職員にも同じ時期にタイからの派遣された長期留学生にも支えてもらって、その困難を乗り越えられた。帰国したら活発に講演のゲストスピーカーに質問し、その内容について堂々と自分の意見を述べ、積極的に議論に参加するようになった。今は日本滞在中に収集してきた資料を参考にしながら論文執筆に励んでいる。立派な研究者の卵として戻ってきた。卒業後は日本に留学し博士課程に進学する志望を持っている。

2.4 日本語教育担当の教員として

このプログラムは学生の成長だけではなく、早稲田実習生の現場での指導者としてもたくさん学ぶことがあった。TAとして同じ科目を担当してもらえることは逆に言えば筆者も含めてチームティーチングである。実習生の失敗したことは自分への注意にもなり、成功した例は参考になった。また、実習生から授業の見学を通して、他の授業の様子を知ることができた。それに、高校への派遣もこれから大学に進学する高校生の日本語教育の現状も把握できる。今後の中等教育と高等教育の連携があるカリキュラムの参考になる。このような連携はパッチャラポーン(2015)が述べていた中等教育と高等教育の縦のアーティキュレーションそのものだといっても過言ではないだろう。

3. SEND プログラムの意義と今後への提言

このプロジェクトを実行するにはとても負担が大きい。しかし同時に、上述の通り、

チェンマイ大学にとって SEND プログラムがもたらす教育成果も大きい。本プログラムは高等教育機関の大学同士（早稲田大学とチェンマイ大学）の連携という横のアーティキュレーションから出発し、課外活動で中等教育と高等教育の連携という縦のアーティキュレーションに拡大した。それに、大学院または研究者同士の連携も横のアーティキュレーションでありながら、学際的なアーティキュレーションにまで発展した。その他、当センターで教師間の交流も試みた。日本における外国人採用の研究をしている早稲田の教員にディナートークという形で講演を依頼した。教員も学生も研究方法について意見交換ができた。筆者はチェンマイ大学の卒業生の日本での就職活動に興味を持ち、共同研究に展開できないかと相談した結果、その教員が大学から研究支援金を申請し、筆者を日本へパイロットスタディーに招待してくれた。また、滞在中に SEND の派遣実習生にタイの日本語教育現状とタイ人学習者の誤用についての講演も行った。このプログラムは大学院生を育成する機関であるチェンマイ大学日本研究センターとしては大変有意義である。

SEND の目的は 最終的にダブルディグリー、ジョイントディグリーへの展開までは国や大学の方針に左右されるため実行する難点が多いが、上述のような教員の相互交流であれば様々な形で実行可能だと思われる。また、共同研究プロジェクトは他の大学の先生も参加する予定で、採用されれば新たなアーティキュレーションが生み出されると期待できる。

SEND プログラムは 2016 年で終わりになる。今までの成功は柔軟性を持つ対話、厳密な事前準備と反省会がカギだと思われる。その大きな負担をいかに減らすことができるかという課題は残されているが、今後もこのような意義あるプログラムが期待されている。

注

- 1 プロジェクトの申請などの準備段階については宮崎・川上（2015）を、派遣前教育については鈴木（2015a）を参考されたい。また、参加大学の困難点についてはパッチャラポーン（2015）、ウォラウット（2015）、ウォーカー（2015）を参照されたい。

参考文献

- 榎原美香・サランヤー コンジット (Saranya Kongjit)・吉田直子 (2015) 「チェンマイ大学日本語学科実践報告—実習生とのチーム・ティーチングから—」『日本語講座年報 2013-2014』大阪大学外国語学部外国語学科日本語専攻、pp. 42-50
- 鈴木伸子 (2015 a) 「SEND 海外実習における派遣チームの変容とメンバーの成長」『早稲田日本語教育学』18、pp. 9-14
- (2015 b) 「SEND 海外派遣における日本語教育実習について」『早稲田日本語教育学』19、pp. 127-131
- 宮崎里司・川上郁雄 (2015) 「SEND プログラムを通して求められる能力とは—日本語教育とグローバル化—」『早稲田日本語教育学』18、pp. 1-8
- ウォーカー泉・齋藤享子・浜崎譲 (2015) 「SEND プログラムの現状と課題—シンガポール国立大学の場合—」『早稲田日本語教育学』18、pp. 39-45
- ウォラウット チラソンバット・松井育美 (2015) 「SEND に参加してからの 2 年間」『早稲田日本語教育学』18、pp. 29-32
- パッチャラポーン ケーオキッサダン (2015) 「SEND プログラム—WSP 協定校の視点から—アー

ディキュレーションを考える」『早稲田日本語教育学』18、pp. 23-27

(こんじつと さらんやー チェンマイ大学人文学部)